1

人間を外見で判断してはいけない。

たとえ十数倍の競争率をクリアし、マスコミ業界の花形（!?）であるシティマガジン、我が『メトロポリタン・インフォメーション』通称M・Iに入社した才媛であろうと、髪はひっつめの、牛乳壜底タイプの眼鏡の愛用者であろうと、幼稚園以来、男女七歳にして席を同じうせずのモットーを守りつづける超保守、時代錯誤的ミッションスクールの卒業生であろうと——。

見かけで人は判断できないものだ。

「やい！　やあまだ！　お前ね、編集長だからって威張るんじゃないよ。お前のやってるようなミニコミ誌なんぞ、はいて捨てるほどあるんだ。自慢じゃないけどね、カドカワだって、あのマガジンハウスだって、ボクをとってくれたんだ。それをだよ、こんな小っちゃな雑誌に入ってやったんだ。ありがたく思えよ、な、やあまだ」

そう、酒乱は、いついかなるときも、一滴のアルコールを口にするまでは見抜くことができない。

かくて新入社員歓迎コンパは、主催者である僕が予想もしなかった恐ろしい状態に突入した。

「別に威張ってなんかいませんよ、僕は」

行きつけのパブ、ここ渋谷『ベアトリス』のキャッシャーは、真由美ちゃんといって、かわいいかわいい十九歳の女の子である。彼女の耳にも、この驚異の新人の叫び声が届くのか、その眉を曇らせてカウンターの端から僕を見守っている。

「うるさい！　ボクが今、喋っているの。それにね、お前の書く映画批評なんか、クサくて、クサくて、読んでられない。映画会社の提灯持ちばっかりじゃないか」

「そんなことはないよ。第一、うちはミニコミじゃなくて、タウン誌。中高生の詩や投稿をのっけているわけじゃないの」

「何をう!?　くやしかったら、日活アクションの特集でも組んでみろってんだ。『銀座旋風児』やマイトガイ、『エースの錠』が泣いてるぞっ。ダラクしとる！　ダラクしとるぞっ！　日本の映画界は……」

とうとうテーブルに顔をふせてしまった。

何を申すか。自分だって日活アクション映画なぞ、名画座の特集か、日曜昼のさしかえ放映でしか見たことがないくせに。

そういいかけて、僕はぐっとこらえた。何といっても、東京オリンピックを知らない世代なのだ。こちらが年上であることを踏まえ、それらしく振る舞わねば——真由美ちゃんもこっち

を見ている。
僕は渋めの笑みを唇の端に浮かべてチーズクラッカーを口にほうりこんだ。途端に、眠りこんだと思っていた彼女が叫んだ。
「それというのも、みんな、おめーら、映画評論家がわるーい！」
クラッカーが湿っていて、くにゃりと折れた。
泣きたい気持ちとはまさにこのこと。それでも、その時点では、僕はまだまだ幸福ともいえた。この後に起こる数々の事件（おいおいお話しますがね）を考えれば、僕はさっさとこの高くついた酒場の勘定を払い（ワイルド・ターキーが二本転がったのだよ）、真由美ちゃんにおやすみをいって帰るべきだった。
大きなまちがいの始まりは、常にささいな出来事から発する。
「よう。盛大に酔っぱらってるじゃねえか」
降ってきた声に僕は振りかえった。
身長百八十八センチ、体重約八十キロ、ダシエル・ハメットが愛した逆三角形の体型は、夜の盛り場よりも、「戦いのワンダーランド」の方が適していると思われる。
武藤俊――僕の旧友にして幼な馴染み、日本でも有数の大ホテル・チェーンの跡継ぎ息子、そして東京の遊び人どもの間では、その人ありと噂された、正真正銘、大の上に超がつく不良、通称「ムウ」がそこに立っていた。
「ムウ！　いつ帰ってきたんだ」僕は腰を浮かして叫んだ。二年前、彼のさまざまな悪さの積

み重ねが、幾多の人々の悪意と敵意の対象となり、ついには日本にいられなくなって、アメリカはニューヨークへと高飛びしていたのだ。
対外的には父親を継ぐための経営哲学と帝王学を身につけることが目的、実のところ、彼ほど欲望中枢から勤労意欲がぬけ落ちた人間を、僕は知らない。
そのムウがニヤッと笑って、空いていた僕の向かいに腰をおろした。
「ずっと音信不通で。ニューヨークじゃ一体、何をしていたんだ」
「いろいろさ」
ムウが答えると、つっぷしていた新人編集者が、がばと身を起こした。その瞬間、彼女の瞳がムウの横顔に吸いよせられ、昔懐かし、トム&ジェリーの漫画もどきにチーンと音をたて、スロットマシンの窓よろしくハートの絵が並ぶのを僕は見た。
「やあ今晩は」
視線にきづいたムウは首を巡らした。
サクラ、というのがこの女性新人につけられた、編集部内での仇名である。といっても、彼女と松竹映画ドル箱路線の登場人物には何の因果関係もない。単に、桜内京子という名からつけられただけのものだ。
「今晩は。あ、あの……編集長のお友達でらっしゃいますか？」
さっきの、やあまだとはうってかわった口調。
「編集長？」

ムウは太くて格好のいい眉を吊り上げた。そういうのがサマになる顔をしているのだ。ハンサムな上に野性味溢れる雰囲気を持っている。女どもが熱をあげるのも無理はない。

「タウン誌をやってるのさ」

僕は「M・I」と書かれた、テーブルの上のボトルを指した。

「M・I？　何だ、イギリスの情報機関みたいな名だな」

「あれは数字がつくんだ。MI5とかMI6というように」

「ふーん。で何してる？　そこで」

「映画や音楽の批評」

ムウはあっけにとられたような顔をした。

「お前が⁉　この間まで単車転がしてバリバリやっていたお前が？」

「あれは学生の時代の話だろ、忘れたのかい」

慌てていったが遅かった。サクラが叫んだ。

「いやだっ。編集長、暴走族だったんですか⁉」

「ちがうよ、そんなのじゃない」

否定しても信じられぬように、サクラは僕を見つめていた。痩せっぽちで、いかにも非力なインテリゲンチャに見える僕が、かってマシンをこよなく愛するライダーであったことを彼女に納得させるのは、容易ではない。

ムウはおかしそうに眺めていたが、ふっと真顔になった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。